グローバルエンターテインメントカンパニー認定製造工場
荏原印刷株式会社が2台目のスピードマスターを導入
スピードマスター CD102-5+L

・会社の順調な成長を支えたあらゆる面での実績が信頼に
・原反を選ばない、厚みを選ばない、オペレータに依存しない汎用性が導入の決め手に
・嬉しい誤算、期待以上に広い“ストライクゾーン”

業態変革を成功させて成長を持続

約 3,500 もの工場があり「ものづくりのまち」として知られている東京都大田区にある荏原印刷株式会社は、PP や PET を利用した印刷製品の製造工場として世界的なエンターテインメント企業からも認定を受けている従業員約 35 名の会社です。創業は、昭和 34 年（1959 年）。日本の高度経済成長と共に着実に企業としての発展に取り組み、当時都内では分業が主流だったのに対して全プロセスの内製化を実行。グローバルブランドの国内大手精密機器メーカーや外資系保険会社の伝票を一手に引き受け、伝票の印刷をメインに会社の基礎を作り上げました。しかし、平成 12 年 (2000 年) を過ぎた頃から、事業の中心であった伝票の印刷というビジネスの将来性に不安を感じ始めました。当時を振り返って監査役の大髙敏氏は、「当時、組合の会合や講習会などに出席すると、将来伝票はなくなるという見解が多方面から聞こえてきました。そこで、伝票の印刷を中心にビジネスを展開してきた私たちも、潮目が大きく変わる前に業態変革をしなければ将来生き残れないと思い、古川さんと相談し、その当時、すでに仕事の一部として取り組んでいたパッケージ印刷を中心とした、今後のビジネスを展開する事を決断をしました。」と述べています。

監査役 大髙敏様（左）、取締役 古川明紀様（右）

2台目のスピードマスターCD102-5+L

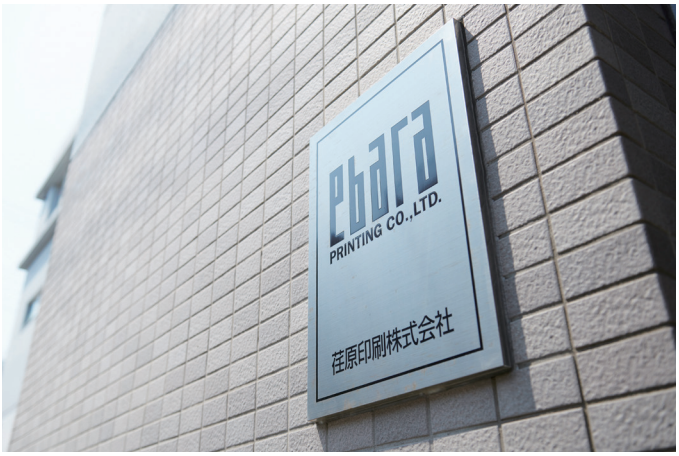
事業の中心を伝票の印刷というひとつの軸足から、2 つの軸足へ方向転換をする決断をしたのです。厚紙の印刷は、平成 13 年 (2001 年) から、すでにスピードマスター CD102-2+L（ニスコーター付き UV 仕様）で金と墨の 2 色パッケージを印刷をすることで経験はしていました。当時はまだほとんどの印刷会社が導入をしていなかったインライン型の UV 印刷機で生産していました。「UV 印刷を始めたのは業界でも非常に早かったのではないかと思います。UV 印刷を採用した理由は、現在のような短納期対応が目的ではありません。厚紙は厚くて重いだけに油性印刷ではパウダーを大量に使用する必要があったり、裏写りや傷、後加工でのトラブルが懸念されました。当時は、現在のように UV 印刷用の材料が豊富にあったわけではなく、私たちも日々チャレンジの繰り返しだったので印刷現場を始め大変苦労した事は忘れません。」と、取締役の古川氏は当時を振り返ります。厚紙印刷というもうひとつの軸足を本格的に築き上げるために、荏原印刷は、平成 16 年 (2004 年)、現所在地に新社屋を建設し、少しでも差別化を実現するために、スピードマスター CD102-5+L（ニスコーター付き UV 仕様）を導入しました。当時、伝票印刷で 2 色までの印刷が中心だった事もあり、印刷オペレータから 4 色の印刷をしてみたいという強い要望もあったようです。その後、PP や PET などへの特殊印刷も含め厚紙印刷の受注は順調に推移し現在、総売上の約 65%を占めるまでになりました。残りの約 35%は商業印刷です。日々 0.95mm の PP・PET や極厚紙に印刷している同社は業界屈指の品質と技術力を誇っています。

HEIDELBERG

今では伝票の印刷はほとんどありません。業態変革を考え始めた2000年からの今日までの20年間で大きな方向転換を果たし、二つ目の軸足が企業としての強みとなり新しい未来を切り拓いています。

常にハイデルベルグと共に

コロナ禍の2020年5月に導入された2台目となるスピードマスターCD102-5+Lは、前述のスピードマスターCD102-2+L（ニスコーター付きUV仕様）とスピードマスターPM74（油性仕様）の4色機との入れ替えでした。導入の理由について監査役の大髙敏氏は、「2004年に導入したスピードマスターCD102-5+Lもまだまだ現役とは言え老朽化しています。経営陣として、危機管理という観点からも、これ1台に依存し続けるリスクを感じていました。そこで、今後もPP・PET・厚紙を中心としたビジネス展開が主となる事や1号機のバックアップとしての目的も含めて、2台目となるスピードマスターCD102-5+L（ニスコーター付きUV仕様）の導入を考えました。」と述べています。荏原印刷は、スピードマスターCD102に加え、現在も活躍中の活版機KSBやKOR等、創業以来ハイデルベルグの印刷機を採用しています。プリプレスでは、2年前からスープラセッター106 - DCL (CtP) を、ワークフローにおいてはパッケージ設計では欠かせないCADデータも処理可能なプリネクトシグナパッケージングプロを採用。後加工では複数の高速断裁機ポーラーを使用しています。また、サフィラブランケット等の印刷必需品についても現在テスト中で採用を検討しています。これについて大髙敏氏は、「長年の実績、そしてパートナーとしての信頼関係は重要なポイントです。しかし、一方で企業の明暗を分ける設備投資を検討する際には自社に最適な製品や提案を精査する為に、多方面からの情報収集や協議を怠った事はありません。入手した情報を精査し、自社にとっての絶対条件を絞り込みます。今回の印刷機に対する設備投資の絶対条件のひとつは、1.0㎜のPP・PETや極厚紙を1号機と同品質で印刷できる事でした。今日までのビジネスで、設備性能から得られた優位性、サービスや営業の方々の人的サポート等、私たちは包括的に評価しています。つまり、長年培われた企業間の信頼関係です。」と語ります。導入前のテストから導入後も機械に目を光らせている古川氏は、「テスト印刷の際に、現在弊社が取り扱っている0.95mmPP等を含む様々な原反でテストをしましたが、期待以上の結果となり、同じスピードマスターCD102シリーズでも、やはり2004年に導入した1号機と比較すると飛躍的な技術的進歩を感じることができました。まず弊社にとっては最も重要な点であり、高く評価しているのは”傷がつきにくい点“です。また、当初は厚紙専用機としての位置付けで導入したのですが、従来のPP・PETやパッケージ用の厚紙に加えて35㎏等の薄紙に対してもグリッパー等の調整は不要で、



「ものづくりのまち」東京都大田区にある荏原印刷

大髙様（右）、古川様（左）、そしてオペレータの大島温司様（中央）

ほぼ最高回転で稼働しておりストライクゾーンの広さと生産性の高さには驚かせられました。まさに嬉しい誤算です。」と続けます。2台目の導入後、1号機は厚紙特殊印刷専用。2号機は、普段は一般商業印刷、そして、1号機の仕事が溢れた場合に厚紙特殊印刷をしています。

将来について大髙敏氏は、「伝票印刷が主業だった時期に全生産プロセスの内製化を図ったように、お客様のニーズをワンストップで解決し、他社ができないような品質を提供する“オンリーワン”と評価してもらえる企業を目指していきたい。現所在地に移転してから工場環境は大きく改善したとは思っていますが、今後もさらなる高みを目指して改善に努めていきたい。最後に、これは大きなチャレンジであることは理解していますが、やはり未来の為に、もうひとつ事業の軸足を増やしたい。現状のBtoBに加えてBtoCつまり消費者ニーズに適応したビジネスを社員一丸となって創造して行きたい。」と力強く語りました。

史上世界一の販売台数を誇るスピードマスター CD102

スピードマスターCD102は、70x100サイズのカテゴリーにおいて50,000ユニット以上の導入実績を誇る、世界で最も販売されている枚葉オフセット印刷機です。ドイツ、ウィスロッホ - ヴァルドルフ工場での生産に加え、2005年にオープンした中国上海郊外にあるハイデルベルグ社のチンプー工場でも組み付けが行われています。ドイツと同じ製造工程、品質基準で管理され、世界中のお客様に向けて出荷されています。すでに15周年を迎えた2020年の7月には、チンプー工場からスピードマスターCD102の9,999ユニット目が出荷されました。

荏原印刷株式会社

本社工場：〒146-0093　東京都大田区矢口2-33-9
TEL：03-5732-0775
FAX：03-5732-0665
https://www.ebara-pt.co.jp/

HEIDELBERG

ハイデルベルグ・ジャパン株式会社
〒140-8541 東京都品川区東品川3-31-8
TEL(03)5715-7377
www.heidelberg.com/jp
11123-2010-HJP-DAT